

第116回山口西田読書会（2016年6月18日）

第115回（同年6月11日）の Protokol

参加者：佐野、岡田、谷、千葉、唐、杉山、山口、岡部（計8人）

『善の研究』第3編第9章「善（活動説）」第1-6/6段落

第1段落 意識の直接経験

行為の価値を定める規範は「意識の直接経験」に求めなければならないとの記述に関して、意識の直接経験を第3編第4章「価値的研究」第4段落（以後3-4-4）で確認した。そこには、「生きるために食う」というときの「生きるため」は後から加えた説明であり、小児がはじめて乳をのむように「説明しうべからざる直接経験の事実」であるとある。西田は「善とはただ意識の内的要求より説明すべき者であって外より説明すべき者ではない」と主張する。

第2段落 意志活動の性質（活動説）

善が何であるかは意志の性質より説明しなければならない。意志が起こるまで、さらに意識が統一されるまでに関しては「行為上」の第3段落（3-1-3）に記述がある。ここに述べてある西田の説は倫理学説の活動説（energetism）にあたる。現実活動態（エネルギー）の語が紹介されて、その実現が困難であることが佐野先生より付言された。

第3段落 自己の内的必然

善と幸福、快楽、満足、理想との関係が、自己の内的要求から説明されている。これが利己主義、我儘主義ではないことの説明は、第11章の第4段落に詳しい（3-11-4）。またアリストテレスの活動説の紹介として（理性→形相=設計図=目的が内にある=エネルギー）／（質料=材料=目的が外にある=キーネーシス）の関係が補足された。

第4段落 意志の発展完成

意志は意識の最深の統一作用であり自己の活動そのものであるから、意志の原因となる要求、理想というものも、自己そのものである。「善とは自己の発展完成 self-realization」であり、「人間の天然自然を発揮するのが人間の善である」と述べている。ここに「自己」とは日常の自己ではなく「本来の自己」（最深なる統一力=大いなる要求）である点、佐野先生より注意があった。

第5段落 善と美

続いて西田は善と美の関係に言及し、「人間が人間の本性を現じた時は美の頂上に達するのである。善は即ち美である」と述べている。

第6段落 善と実在

さらに自己の発展完成は、自己の実在の法則にしたがい、自己の真実在と一致することで最上のものになる。道徳の法則は、究極には実在の法則に含まれる。真の自己を知るといのはその意味にほかならない。

※ここでは存在と価値とを分けて考えていない。これまで西田は分けて考えるべきだと述べてきているがそこはどう整理すればよいのか、佐野先生より課題とされた。